

創立 130 周年式典の挨拶

本日は御多忙な中、御来賓の方を始め多くの皆様の御臨席を賜り、誠にありがとうございます。大阪府立茨木高等学校創立 130 周年記念式典をこのように盛大に挙行できます事、教職員と生徒を代表して厚く御礼申し上げます。

さて、本校は 1895 (明治 28) 年に大阪府第四尋常中学校として開校しました。明治、大正、昭和、平成、令和と時が流れ、様々な社会の在り様に応じ、興味関心の行方や価値観が大きく移り行く中で、創立以来、常に有為な人材を社会に輩出して参りました。

なぜ、そうあり続けられたのか。先日、先週の金曜日の早朝、校長室から正門を眺めると、一人のご高齢の方が立っておられました。正面を向き、校舎をご覧になられ、姿勢を整え、少し右側に視線を移し、体をそちらに向け、そこからゆっくりと深々とお辞儀をされました。ご本人の意図も詳細もわかりません。ご覧になっていた先には「勤儉力行」、「以文会友」が記された二つの石碑がありました。

初代校長加藤逢吉先生が定められた校訓「勤儉力行」、創立初年の「学事年報」に「常ニ生徒ヲシテ徳行ヲ励ムノ氣風ヲ養ヒ、殊ニ勤儉力行ノ性ヲ養成センコトヲ勤ム」とあり、この四文字を見出すことができます。いつ、どんな形で校訓として制定されたかは明らかでありませんが、ごく自然に本校の方針や校風を表すものになっていった。それは加藤校長先生のお心の中にあり、常に「勤儉力行」を体現され、生徒、教職員の気風となっていましたこと、さらに加藤先生は「一度信ずればその人の仕事に殆ど干渉しない」人物だったということ、それにより「大阪府の学校」や「校長の学校」ではなく教員にとっても、生徒にとっても「自分の学校」という信念を持つに至る。それが「自分たちの学校」という絆を作ったと、茨木高校百年史にあります。

川端康成、ノーベル文学賞受賞(昭和 43 年)を記念して、作られた石碑、文学碑「以文会友」除幕の際にご本人のあいさつの中で『以文会友』は論語にある言葉で、『文』は文学という狭い意味ではなく、文化一般、あるいは道徳・倫理、あるいは誠の心、美しい心・優しい心により、"友"と会い、友人を作つて、つまり人間が結ばれる。結ばれ合うという意味で、非常に広い、いろいろな意味に解釈されると思う。』と述べておられます。

一度、人を信じたらすべてを任せ、預け切る。美しい心、やさしい心により人と人が結び合う、結ばれ合う。百数十年の積み重ねられてきた時を経て、生み出され、育まれてきた、茨木高校の伝統の源の一つがまさにここにあると思われます。

「勤儉力行」「以文会友」はどのようにして茨高に浸透していったのでしょうか。この 10 年にスポットを当て北辰プロジェクトを眺めると、スプリングセミナー、リーダー育成プログラム、学問発見講座、京大研究室訪問、東京スタディーツアー、オータムセミナー、卒業生講座とあります。卒業生の添えていただくお力に支えられて成り立っている行事が並んでいます。ご指導くださる卒業生の方々は、みなさん、学術界、また社会の第一線でご活躍され、多忙な日常であるにもかかわらず、一年で一番忙しい新年度開始時や過酷な夏の暑い時期にも関わらず、多くの方々が快く後輩を迎える、力を尽くしてくださっておられます。渡

米を翌日に控えておられたり、大阪を中継し日本を縦断するスケジュールの中で、ご来校され、講座を開いてくださるようなこともありました。そしていずれのご講演、ご講義もその講師の方々とのご縁を結べるよう長い時間をかけて働きかけ、お話ししていただいた方々の添えてくださる大きなお力のおかげで実施が叶い、拝聴できる機会が得られていることも特筆すべき点です。公演、講義の中でのお話そのものや、その足跡、併まいの中で示して下さる「勤儉力行」、美しい心に触れ、心結ばれる中で在校生にもその精神が芽生え、滲み込み、育まれ、定着し様々な場面で滲み、溢れ出していきます。連綿と続くその営みの中で、逆境を乗り越えていくたくましさが身についていきます。

最低気温マイナス6°Cの中での妙見夜行登山。警察から断念を迫られる中でぎりぎりの判断をし、記念碑で折り返してのゴール。関西空港にタンカーが直撃した台風21号に見舞われ、マスクottが破壊される厳しい中でやり切った体育祭。同年、宿泊野外活動セブ島への出発当日、北摂を襲った北部地震。粘り強く調整、交渉を重ね5か月後に実施が叶った。時間をかけた分、密度の濃い充実した旅とした。様々な自然現象と戦い、自分たちの思いを形にしてきた茨高生。しかしさらに、この130年の中で誰も体験したことのない感染症が猛威を振るい、襲い掛かってきました。生徒の通わない学校。誰もいない教室。突然の公式戦の中止、クラブの引退。かかわるすべての人の心の奥深いところをえぐり取り、すべてを奪い去っていった。その状況の中、2年生、74期生はベトナムから東北、そして時期を1月まで延長して東北へと行き先を変更するも状況が悪化。出発10日前の突然の延期の指示。その状況下で、結団式を行う時間帯にレクレーションを企画、できることを共有し、喜びを分かち合い、行事委員への感謝の気落ちが届けられた。その年の3年生、73期生にとって体育祭の実施の可否を決める行程は過酷であった。クラス討議、生徒議会、2時間以上かけての話し合い。執行部からの中止の原案。原案に対する修正案。34ページもの添付資料。そこには感染症リスク回避のための対策やプログラムの具体案が示された。過半数に一票及ばず修正案は否決。体育祭は中止となった。

翌年、宿泊野外行事の断念を余儀なくされた74期生、3年生は度重なる突然の活動停止や休校措置がとられる中で体育祭の応援にかかわるパートの部分実施に成功する。少しでも可能性があるならできることに価値を見出し、ゴールをめざす。それは73期生が懸命に歩んだ道。74期生が辿り着く先には73期生の成し遂げたかった思いがある。74期生が成し遂げてくれたものを75期以降78期生まで櫻リレーがなされている。全世界であらゆることを奪おうとした感染症が蔓延する中で130年の歴史を途切れることなく手渡された櫻。おそらくその櫻には「勤儉力行」「以文会友」の言葉が記されてあつたであろう。

伝統が潰えるかのように思えたこの時期に櫻を繋いだ生徒の言葉を「中学生保護者向け学校説明会」「答辞」「スプリングセミナー」より引用してご紹介したい。「宿泊野外行事の中止、体育祭の中止、まさしく負の連続の中、そのすべてを生徒自治によって行えたことは新しい自分を作っていく糧となっている。」「ダメと言われることが数多くある中で濁点をとり、ためになることを生み出し続けた」「コツコツと積み上げたものが一瞬の国や大阪府の発表で突然中止になり、また始めるという繰り返しの中で、何ができる、何がダメかを考えながら0から作り上げることの楽しさを知った。」

120年繋いできた襷がこの10年の中でも手渡されている。スプリングセミナー、宿泊野外行事、妙見夜行登山、体育祭、行事の数だけ委員会が存在し、委員会の数だけリーダーが生まれフォロワーとなる機会を得る。誠の心、美しい心により出会った友と0から1を作る機会を得る。その度に考えられなかった奇跡を生む。奇跡には方程式がある。音楽会での取り組みの応援に駆けつけてくださった世界的指揮者、佐渡裕さんのお言葉だ。その方程式の三要素は才能、努力、運、まずその3つを足しあう。でもそれだけでは奇跡は起こらない。その3つをかっこでくくり、その和に感謝をかける。感謝の心がないところに奇跡は起こらない。自主自律を掲げ、全力で取り組んできたあらゆる時代を駆け抜けてきた諸先輩、じっと見守り続けて下さった歴代の校長先生を始めとする先生方、ずっと支え、背中を押し続けてくださった同窓会、久敬会の方々、健全な学校生活を送れるよう力を尽くして下さった学校医、学校歯科医、薬剤師様。そして茨木高校に生徒をお預け下さった保護者のみなさまに感謝の念をお伝えいたします。その感謝の念を乗じ、枠を超える知性を身につけた才能と自主自律の精神に基づいた努力、高い志に舞い降りてくる幸運を身に纏い、社会に、日本に、世界に、そして宇宙にまでも奇跡を起こし続けることを願いながら歩んで参ります。

結びに、本日御臨席の皆様方に、生徒及び教職員一同がこの茨木高校130年の中での在り様を再確認し、伝統、文化を継承しながら更なる歩みを進めていく事をお約束致します。どうか今後とも御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様の御多幸を祈念申し上げ、式辞と致します。

令和7年10月18日
大阪府立茨木高等学校
校長 高江洲 良昌